

# Loohcs高等学院 入試問題

－概要と問題例－

# Loohcs高等学院 入試概要

## 入試概要

一次試験:書類選考

二次試験:筆記試験・面接

筆記試験については、選択式である「問題探究型テスト」ないし「課題解決型テスト」のいずれかを受験します。

## 筆記試験概要

### 問題探究型テスト(選択式)

問題探究型テストでは短い資料を読んだ上で、そこで論じられているテーマに関する自分なりの意見を800字程度で書いてもらいます。具体的には、「学ぶとはどういうことか」など簡単な問いが設定され、それに関連する資料を読んだ上で、自分自身の考えを主張してもらいます。

試験時間:60分

### 課題解決型テスト(選択式)

課題解決型テストもまた短い資料を読み込んだ上で、そこで論じられているテーマに関する自分なりの意見を800字程度で書いてもらいます。具体的には、「少子高齢化社会」の問題に関する資料を読んだ上で、解決すべき問題を設定し、その問題を解決するための方法を提案するなどしてもらいます。

試験時間:60分

# Loohcs高等学院

## 入試問題例 問題探究型テスト

大問1 次の文章は、近代哲学の始祖ともいわれるルネ・デカルトの『方法序説』という本の一節です。以下の文章を読んで問いに答えなさい。

引用文1 良識(注1)はこの世でもっとも公平に分け与えられているものである。(岩波文庫『方法序説』8ページ)

引用文2 わたしは教師たちへの従属から解放されるとすぐに、文字による学問(注2)をまったく放棄してしまっただ。そしてこれからは、わたし自身のうちに、あるいは世界という大きな書物のうちに見つかるかもしれない学問だけを探究しようと思ひ、青春の残りをつかって次のことをした。旅をし、あちこちの宮廷や軍隊を見、気質や身分の異なるさまざまな人たちと交わり、さまざまな経験を積み、運命の巡り合わせる機会をとらえて自分に試練を課し、いたるところで目の前に現れる事柄について反省を加え、そこから何らかの利点を引き出すことだ。(岩波文庫『方法序説』17ページ)

注1:物事が正しいか間違っているかを判断できる能力。ある種の「常識」と捉えてもよい。

注2:文字による学問とは、たとえば哲学書や小説などの書物を、いわゆる学校の授業のような形で学ぶこと、と考えてよい。

問い デカルトの主張に対するあなた自身の考えを800字程度で述べなさい。ただし、回答において引用文1と引用文2の両方についてふまえること。

# Loohcs高等学院

## 入試問題例 課題解決型テスト

大問1 文章1～6を読み取り、これからの日本社会で将来起こりうると推測される問題を一つ指摘しなさい。そしてその問題を解決するために何ができるかについてあなた自身の考えを800字程度で書きなさい。

なお、文章2以降は戦後日本史を概観したものである。

文章1 日本は英米にくらべ、農林自営業や小企業が多い。そして「近代的大企業」と「前近代的な労使関係に立つ小企業及び家族経営による零細企業と農業」が両極化しており、「一国のうちに、先進国と後進国の二重構造が存在するに等しい」(小熊英二『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社学術文庫 70ページ)

文章2 敗戦から1950年代までは、地方に人口が滞留し、農林自営業が増加するという歴史の逆行がおきていた。これは戦争によって都市部の産業が壊滅し、地方に移動せざるを得なくなったためである。

文章3 1950年代後半からは、高度経済成長にともなって、都市部への大規模な移動がおきた。就業者が減少したのは、おもに地方の農林自営業である。「団塊世代」の就職がこれに重なり、労働力の供給が経済成長を押しあげた。高校・大学の進学率の急上昇がおきたのも、この時期である。

文章4 1973年の石油ショックの時期に、高度経済成長は終わった。公共事業の配分が行われたためもあって、都市部への人口移動は止まり、大学進学率も政策的に抑制された。大企業は雇用を増やさず、むしろ人員整理を行ったが、中小企業と非農林自営業が過剰な労働力を吸収した。

文章5 しかし1980年代から、非農林自営業が減少しはじめた。その前後から、家族労働者の女性や高齢者など、縁辺労働力の非正規雇用が増大した。この時期以降、正社員の数は、バブル期の一時的増加をのぞけばほぼ一定である。

文章6 2000年代前後から、景気の変動にかかわらず、都市部への人口移動が常態化した。自営業および小企業の就業者減少が顕著となり、非正規雇用が増大した。とはいえ、日本型雇用慣行は、コア部分では大きく変化していない。非正規労働者の比率が高いのは、女性・高齢者・若者などの縁辺労働力である。

(文章2-6 小熊英二『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社学術文庫79-80ページ)